

【発表 NO.17】

外国人児童生徒等の日本語指導に関するオンライン研修
—資質・能力の「豆の木モデル」にもとづく研修デザインの提案—

谷啓子・齋藤ひろみ・工藤聖子・稲田直子・小西円（東京学芸大学）

1. 発表の背景と目的

現在、全国各地で教育委員会や自治体の国際交流協会等によって子どもの日本語教育担当教員、支援者向けの研修が企画・実施されている。しかし「どのような研修内容を実施すべきか分からない」との声も多く聞かれる。また、コロナ禍以降、オンライン研修が盛んに行われるようになり、研修機会が少ない人や、対面研修への参加が難しい人にとって、研修機会が拡大した。その一方で、オンラインという特徴を活かした研修に関しては十分に検討がなされていない。

発表者は、東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット（本ユニット）において、2023年度より年3回、日本語指導初任者向けのオンライン研修を実施してきた。その際、外国人児童生徒等教育を担う人材の資質・能力モデル「豆の木モデル」（日本語教育学会、2020）に照らし目指す資質能力を設定し、内容を構成した。これにより、参加者も研修実施側も各回のめあてを焦点化することができた。本発表では、2025年度の研修を中心に研修の企画・実施の実相を報告し、「豆の木モデル」に基づく初任者向けオンライン研修のデザインを提案することを目的とする。

2. 研修の概要

2.1 全3回のテーマと目指す資質能力

成長発達の過程にある子どもにとって、ことばを獲得することは、世界を広げ、発達することであり、子どもの日本語指導は全人的な教育であることから「幼・小・中・高の学びの連続性」を重視した全体テーマを設定した。まだ経験の短い参加者に、日本語を学ぶ子どもたちの状況、現場や実践について、理論背景とともに具体的なイメージをもって実践的な理解を深めてもらうよう内容構成し、各回で初任者に必要な資質能力と求められる具体的な力を検討、配置した。

表1：2025年度オンライン研修～多様性が生きることばの教育2025～
「幼・小・中・高の学びの連続性を保障することばの教育」

実施日 参加者数	テーマ	目指す資質能力と 求められる具体的な力（抜粋）
第1回 6/8（日） 112人	子どもの持てる力と経験を 新たな学びにつなぐ ～初期支援と活動のアイデア～	【捉える力】「子どもの実態の把握」 【育む力】「日本語・教科の力の育成」 【つなぐ力】「学校づくり」
第2回 7/6（日） 116人	探究する力・自律的に学ぶ力を 高める日本語と教科の統合学習	【育む力】「日本語・教科の力の育成」
第3回 8/3（日） 100人	アイデンティティと 関係づくりを支える ～ことばの教育実践を通じて～	【捉える力】「子供の实態の把握」 「社会的背景の理解」 【育む力】「異文化間能力の涵養」

研修は双方向型オンラインで1回2.5時間である。構成としては、①動画の事前視聴（本ユニット作成2025より20分に編集）、②趣旨説明とめざす資質能力の確認、③動画の復習を含む講義、④事例報告、⑤グループワークと全体共有、⑥アンケートによる資質能力の振り返りの6

ステップを進めた。

企画段階で、求められる具体的な力に基づき、事前視聴用動画や講義の準備、事例報告者への説明、ワークの検討等を行った。目指す力を明確化したことで、一貫した研修の流れを作ることができ、特に事例報告者にも資質能力とともに趣旨を説明することで理解を得られた。

2.2 参加者の背景

研修の主な対象は初めて日本語指導を担当する／または経験が短い教員や支援者である。アンケートの結果から、参加者の指導・支援の経験年数は3年以下の初任者が第1回は54.6%、第2回は46.9%、第3回は56.1%であった。外国人児童生徒等との関わりとしては、「日本語指導・日本語学習支援を行っている」と「教科指導・教科学習支援を行っている」を合わせて約8割、立場は「教諭」「講師」「指導員（教育委員会等から派遣）」で7割、その他「地域支援者」「行政関係」と続く。活動する場所は小中学校で6割、高校が1割であった。

3. 研修の成果

参加者には、広報段階よりウェブサイトで見学力を明示し、当日冒頭の趣旨説明で確認することで各回のめあてを意識化した。さらに終了時に各自がアンケートでめあてとした力が高められたかどうか4件法でチェックし、研修の学びや高めた力を「今後どのように教育活動・支援活動で活かせる／活かしていきたいと思うか」自由記述してもらった。

アンケート結果を見ると、各回とも講義・事例報告・グループワークとも「とても参考になった」「参考になった」が9割以上である。講義・事例に関しては、経験年数が長い参加者より初任者（1年目＋2～3年目）の方が高い傾向が見られた。

めあてとした力については、「高められた／ある程度高められた」が全体で約8割であり、以下のように、研修テーマである幼・小・中・高間の、また初期段階の日本語学習と教科内容の学びの連続性に関して【育む力】【捉える力】が意識された記述（A・B・C）や、連続性を編み出す環境に視点をあてた記述が（D）見られた。

- | |
|--|
| <p>A) 発達段階に応じた指導を心がけていますが、同学年でも環境等により、ひとりひとり違うので難しさを感じます。初期段階から教科につなげることを意識した学びを取り込んでいきたいです。</p> <p>B) 児童を見つめ直して、今、必要な日本語の力と教科の内容を見極めることから始めようと思いました。そして、日本語指導の学習内容をねらいを持って組み立てるようにしていこうと思いました。</p> <p>C) まずはご紹介していただいた実践例を試してみて、そこから児童・生徒に合うようアレンジしていきたいです。</p> <p>D) つなぐ力において、校内の支援体制構築に向けて、自分一人ではなく、周囲と協力して取り組んでいきたいです。</p> |
|--|

このことから、「豆の木モデル」に基づきめあてを明確化し、研修を構造的にデザインすることにより、参加者の課題の意識化と実践における次の一歩の具体化が促されることが示唆された。

付記 共同研究者：原瑞穂・米本和弘・見世千賀子（東京学芸大学）・河野俊之（横浜国立大学）

【参考文献】

- 日本語教育学会(2020)『文科省委託（2017-2019年度）事業 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック』
- 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット(2025)

【研修動画】「初めて教える人のための田中先生と学ぶ子どもの日本語指導」

<https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/resource/content1.html>

